

【プロジェクト研究】

キャベツ・ハクサイにおける肥効調節型肥料と生分解性マルチを用いた施肥量削減

肥効調節型肥料を用い生分解性マルチで被覆すると、秋作キャベツで 20 %、春作キャベツで 30 %、秋作および春作ハクサイで 30 %減肥しても収量はほぼ維持され、地下水への窒素負荷を軽減する施肥法として有効である。

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜部(担当者：岩本 英伸)

研究のねらい

近年、硝酸性窒素による地下水汚染が問題となっており、その原因の一つとして過剰な窒素の施肥が指摘されている。そこで生産性を維持しながら環境への負荷を軽減するために、キャベツおよびハクサイにおける肥効調節型肥料と生分解性マルチを用いた窒素施肥量削減効果について明らかにする。

研究の成果

- 1．キャベツにおいて肥効調節型肥料を用い生分解性マルチで被覆すると、秋作で 20 %、春作で 30 %減肥しても、慣行施肥とほぼ同等の結球重が得られる(図 1)。
- 2．ハクサイにおいて肥効調節型肥料を用い生分解性マルチで被覆すると、秋作、春作ともに 30 %減肥しても慣行施肥とほぼ同等の結球重が得られる(図 2)。

普及上の留意点

- 1．肥効調節型肥料は 70 日タイプのものを使用する。
- 2．生分解性マルチは黒色のものを使用した。

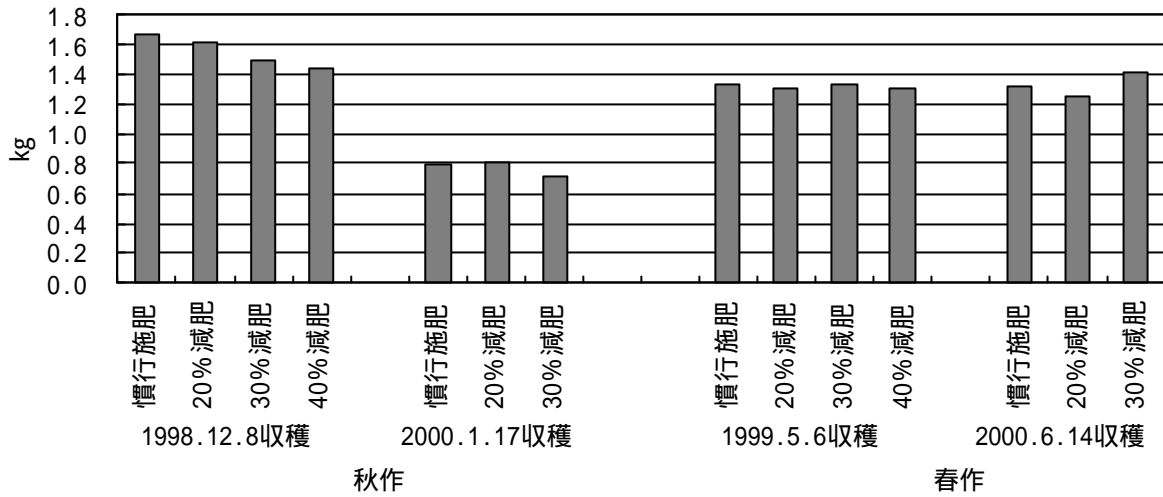


図1 キャベツの結球重

慣行施肥のN施肥量は2.4kg/a

1999年春作のみトンネル栽培

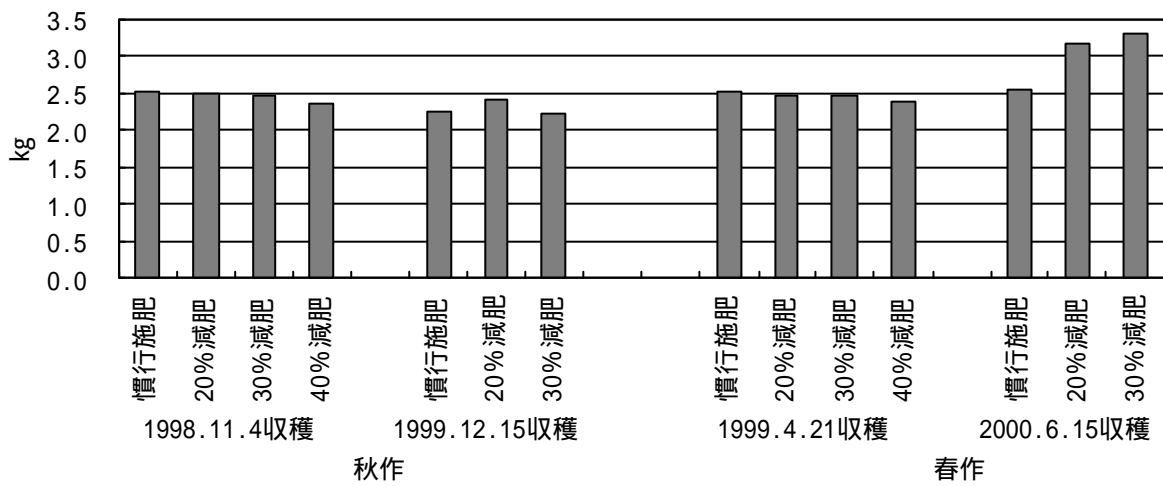


図2 ハクサイの結球重

慣行施肥のN施肥量は1998年秋作および1999年春作2.0kg/a、

1999年秋作および2000年春作は2.4kg/a

1999年春作のみトンネル栽培